

## 審査の結果の要旨

氏名 佐々木 俊介

「廃棄物最終処分場におけるインフォーマル・リサイクル—インドネシア共和国バンタル・グバン廃棄物最終処分場を事例に一」と題する本論文では、スカベンジャーやウェイスト・ピッカーによる都市廃棄物のリサイクル活動であるインフォーマル・リサイクルを研究対象として取り扱っている。本論文の目的は、インドネシア共和国バンタル・グバン廃棄物最終処分場のスカベンジャー社会を事例に、統合的な廃棄物処理政策の可能性を検討することにある。

第1章で世界各国のインフォーマル・リサイクルに関する先行研究をレビューし、本論文の目的と構成を述べた上で、第2章では本研究の調査地であるバンタル・グバン廃棄物最終処分場およびその近隣に形成されている、スカベンジャーの居住区であるスラム街の概要について述べている。現地調査は2010年2月11日~2014年8月9日までの間に、計16回（合計滞在日数634日間）、インドネシア共和国のブカシ市のバンタル・グバンにあるスラム街において、インドネシア語を用いて実施しており、参与観察や非構造化インタビューを実施するとともに、必要に応じて構造化インタビューを実施している。

第3章から第5章は調査結果について述べており、第3章では調査地におけるスカベンジャーの7類型および各類型の人口構成について述べている。また、調査地においてはインフォーマル・リサイクルに関する作業が少なくとも11種類存在しており、どの作業を、どの立場で行うかにより、6つの労働のモードとして示される。スカベンジャーたちは、ボスを中心としたグループを形成している。ボスと子分とは親分と子分という一定の身分関係にあるが、子分がボスを変えることは珍しくない。また、子分の地位にあったものがボスへと成長することも、ボスの地位にある者が子分を失うことも珍しくない。

第4章では、調査地における有価物の収集および取引方法について述べており、ウェイスト・ピッカーたちが収集している有価物は、少なくとも70種類存在する。また、有価物の取引方法は大きく分けて2つある。1つは親分子分関係にあるボスとの取引で用いられる *Nimbang* と呼ばれる方法で、たとえば2週間に1度など定期的に行われている。もう1つは、日々行われている行商人との

取引である。Nimbang における有価物の重量計測は、ボスと子分とが一緒に行い、計測された値は、子分とボスの両方がメモを作成し、ボスはそのメモに基づき取引伝票を作成し、子分はメモの内容に基づき伝票の内容を確認することができる。

第5章では、調査地におけるウェイト・ピッカーの平均有価物収集量と平均収入について述べている。ウェイト・ピッカーたちは、世帯あたり1日平均126.7kgの有価物を収集している。ウェイト・ピッカーの単身世帯の1日当たり有価物収集量は171.7kgである。重量ベースで見た場合、最も多く収集されている有価物はビニール袋であり、総重量の7割以上を占めており、その次に多いハード・プラスチックを加えると、総重量の8割以上がプラスチック系有価物である。また、ウェイト・ピッカーの平均月収は、US\$240.2であり、賃労働者の平均月収は、日当を得て行うタイプはUS\$94.5（ただし、ボスから食事が提供されている）、歩合で積み込みを行うタイプはUS\$245.1、歩合で分別を行うタイプはUS\$49.3（妻である女性が多く、賃労働は副収入）である。

第6章では、アクター間の社会関係、労働および売買の側面から調査地の社会・経済・文化について総合的に考察している。とりわけ、ウェイト・ピッカーにより達成されたリサイクル率を推算するとともに、ウェイト・ピッカーの経済レベルについてインドネシアの法定最低賃金と比較して論じている。さらに、ウェイト・ピッカーをフォーマル・セクターに組み入れるという形での統合的廃棄物処理の可能性について議論、提言している。最後に、第7章では結論と今後の展望を要約して述べている。

以上を要約すると、本論文は、インドネシア共和国バンタル・グバン廃棄物最終処分場のスカベンジャーの社会経済的な実態を、調査地における有価物の重量計測結果に基づいて作成された取引伝票データを積み上げ方式で計算することを通して定量的に解明した初めての学術研究例である。さらに、インフォーマル・リサイクルをフォーマル・リサイクルに組み込む統合的な廃棄物処理政策の可能性について上記の定量データに基づき論じており、途上国における廃棄物処理政策の策定に必要な基礎情報を提供するという応用上の価値も高い。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。